Book Review 36-10 呪術　＃ガダラの豚

『＃ガダラの豚』（中島らも著）を読んでみた。著者は小説家、劇作家、随筆家、放送作家、ミュージシャンで、アルコール依存症であったようだ。本書で日本推理作家協会賞を受賞している。

第一部
主人公であるアフリカの呪術医研究の第一人者０は、著者と同じくアルコールが手放せないアルコール依存症という設定である。０は超能力ブームに乗って呪術の本を執筆しベストセラー作家になり、テレビの人気タレント教授となっている。しかし、妻のＩは８年前の０のアフリカでの研究に娘Ｓと同行し、時間を持て余して乗った気球で事故に会い娘Ｓを亡くしている。それ以来、神経を病んで、奇跡が売り物の新興宗教にのめり込んでしまった。妻を教団から奪還すべく、０は奇術師ミラクルと組んで動き出す。自称宗教者が行う「奇跡」を科学的に論破してゆく過程は、成程と感心させられる。

第二部
アフリカにフィールドワークに行くが、トラブルに巻き込まれる。ケニアの凶悪で老獪な呪術師との呪術バトルを繰り広げる。

第三部
日本に帰ってきて、０はアルコール治療病棟に入る。その後密教系のお寺で断酒修行も行う。治療を終えて家に帰ると、凶悪で老獪な呪術師が日本まで追ってきて呪術合戦と肉弾戦で、０の関係者は屍の山となる。殺され方が尋常ではない。さて、０の家族は生き延びることができるのか。

「民族学と宗教学が絡んだ冒険譚」とか「奇術に呪術に超能力、ホラーとバイオレンスとロードムービー」、「親子の絆を毒のある笑いで包み込んだ奇才の代表作」と讃える読者もいる。ドリフターズのドタバタ劇を観るような面白さ！

「ガダラの豚」って何？　キリスト教の福音書にある話だそうである。ガダラ人の地の墓場で、悪霊に憑かれた男の悪霊をイエスが豚にとりつかせる。悪霊は豚の群れに移り、豚の群れは崖を下って、ガリラヤ湖で溺れ死んだというエピソード。ガダラの豚の伝承は、様々な文学作品において重要なモチーフとな

っているらしい。ドストエフスキー『悪霊』や夏目漱石『夢十夜』の第十話、三島由紀夫『豊饒の海』でも暗に描かれているようだ。

本書のタイトル、「ガダラの豚」って一体誰のこと？